

隨泉寺寺報

平成 22 年 (2010 年) 10 月号 第 482 号

TEL 082-892-0217 http://www.zuisenji.com/

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

秋季永代経法要

講師 浄念寺住職 安達高潤師

講題 『阿弥陀仏の願い』

■永代経法要 ～永代に教えを伝える～

今年の気候は不順で彼岸花がなかなか咲きませんでした。彼岸花は、はかったようにお彼岸になると赤い花が咲いていましたが、今年は9月末になってようやく咲き出しました。

さて、10月は、永代経法要をお勤めします。御講師は、呉市安登町の浄念寺住職の安達高潤先生です。安達先生は、高校、大学の同級生で、当時、宗教教育部というサークル（龍谷大学と京都女子大の合同クラブ）で活躍された尊敬する先生です。子どもたちの宗教情操教育の一環として、幼稚園も開園され、熱心に教化活動を展開され、わたしも懇意にさせていただいている方です。30歳ぐらいから真宗学の勉強に目覚められ、大阪の行信教校にも熱心にわれ、自坊でもなくなられた利井先生の勉強会などを催され、いろいろなでご活躍なさっています。



私もお会いできるのを楽しみにしています。ぜひ、お参りください。

10月の法座予定

- 10月10日……………掃除 長者原東
- 10月14日昼席午後1時より……………秋季永代経法要
- 10月14日夜席午後7時より……………出張法座 長者原東 延 義則氏宅
- 10月15日朝席午前10時より……………若い婦人の集い おとき
- 10月15日昼席午後1時より……………秋季永代経法要
- 11月 2日午後6時より……………門信徒会本部役員会

☆ 永代経法要 (えいたいきょうほうよう)

浄土真宗における「永代経」とは「永代読経」の略であり、「未来永代、末永く釋尊の説かれた真実の教えである経が読み続けられ、その経が聞き続けられ、その教えに救済され続けられる」ことを願い勤まる法要です。

多くの場合、自分に先立ち浄土に還られた方(先達・先祖)を憶念し、先達が聞き大事にしてこれた経(教)を今を生きる私も頂こう、そして未来永代子々孫々にその経(教)を伝えようという願いのもと勤まるわけです。

先達・先祖を御縁にするというかたちをとりますので、“永代経は先祖への永代の追善供養、という認識が強いですが、浄土真宗における「永代経」は、“先達・先祖を御縁として私が経(教)を頂き未来永代に伝える、ということが本義となります。

永代経とは、“永代読経(えいたいどっきょう)”の略で「末永く(永代に)お経が読まれる」という意味です。そこからまた「お寺が存続し、み教えが繁盛し続けるように」という願いが込められた意味にもなります。つまり (1)お寺が護持されること (2)そこで子や孫が代々にわたってみ教えを聞き慶ぶこと—この2つが「永代経」の心だと言ってよいでしょう。故人への追慕から納められる場合がほとんどで、

表書きには「永代経志」などの文字の右肩に、故人の法名を記したりします。これは“故人のために納める”というのではなく、故人の「永代にみ教えが伝わるように」との意志を受けた施主が“故人になり代わって納める”からです。



この「永代経法要」ですが、もともと浄土真宗で勤まっていた法要ではありません。「永代経」の起源について確かな資料はありませんが、浄土真宗本願寺派(西)の第十四代寂如(じゃくにょ)上人(1662~1725)の頃に勤まっていたという記録が、本願寺系統における「永代経」の初見だそうです。

亡き人への追慕の心は非常に複雑。親しみや愛情だけでなく、憎しみや怨みもあります。そういった生者の“心”が御縁となって教えが聞こえることもあると思うし、そういった心を汲み取るのが真宗寺院住職の仕事なのだと思います。したがって、尊いお念仏のみ教えを伝えてくださった、ご先祖の遺徳を偲び、私自身が聞法に励んで、今度はその法灯を子孫に伝えて行ってこそ、その名のり『永代経』と言い得るのです。

☆御礼

- | | | | | | |
|-------|---|-----|-------|----------|-----------|
| 永代経懇志 | 金 | 拾萬円 | 鍋島幸子殿 | 故 鍋島 輝雄様 | 特 永代経志として |
| 永代経懇志 | 金 | 拾萬円 | 鍋島幸子殿 | 林家先祖一切様 | 特 永代経志として |
| 永代経懇志 | 金 | 拾萬円 | 落合康壮殿 | 故 落合キヨコ様 | 特 永代経志として |

☆御礼

- | | | | | | |
|-------|---|----|--------|----------|---------|
| 門信徒会へ | 金 | 一封 | 落合 康壮殿 | 故 落合キヨコ様 | 香典返しとして |
|-------|---|----|--------|----------|---------|

10月

信心の人を 真の仏弟子といえり

『親鸞聖人御消息』（註釈版聖典 748頁）

親鸞聖人の主著『教行信証』には「真仏弟子釈」があります。今月の言葉より、信心の人を真の仏弟子だと述べられるのですが、詳しく丁寧に真の仏弟子を示されます。

そこでは最初に、阿弥陀仏の光明に遇うと心が柔らかくなるとされ、続いて、教えを聞いて忘れず、教えを敬い、教えをよろこぶ人は釈尊の親友であるといわれ、人中の分陀利華、すなわち白蓮華であるといわれます。さらには、人中の好人、妙好人、上上人、希有人、最勝人といわれ、釈尊滅後、五十六億七千万年してこの世界に現れるという弥勒菩薩と等しいといわれます。

このように信心の人を褒めたたえた後に、自分自身を振り返り、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥づべし傷むべしと。

（『註釈版聖典』二六六頁）

と、真の仏弟子とはほど遠い自分のすがたを悲嘆されます。

信心をいただくと、次の生で必ず仏のさとりを開くという正定聚の に就くといわれています。親鸞聖人は、当然、正定聚の に就き、仏のさとりに近づいている方です。

聖人は仏のさとりを得ようと比叡山で修行された方ですから、正定衆の に就くことほどのよろこびはないはずですが、よろこぶべきことをよろこべないと言われます。そればかりか、この文の最初に、愛欲の世界に沈没し、名誉や利益の世界に迷い惑っていると告白されます。

私はこの文章を見て、なるほど親鸞聖人はご自身がおっしゃるように、真の仏弟子とはほど遠い方だったとは思えませんでした。むしろ真の仏弟子のすがたを見せていただいているように感じま

す。

もし、「私が真の仏弟子である」「私は将来妙好人と呼ばれるかもしれない」といった人がいたら、思わず「本当かな」といってしまいそうです。

本来よろこぶべきことをよろこぶことができず、本来嘆くべきことを嘆くことができないという悲嘆とその一方で、言葉にはなっていないが、このような私にまで救いの光明が至りとどいているというよろこびの世界に、私は、真の仏弟子のすがたが感じ取れました。

蛇足ですが、愛欲や名利の世界にどっぷりと浸かっていることは当然のことだと

いっておられるのではありません。

「親父、あたたかな愛情をありがとう」

頑固で厳しいながらも、内には深い愛を秘めた父でした。

祖父の興した株式会社 井谷種苗園の二代目代表として、長年経営に携ってまいりました。父は会社のことばかりでなく、常に業界全体のことを考えながら種苗業の発展に尽くしていました。私が幼い頃、家業とは違う職に就きたいと言ったとき、熱心に説得した父。自ら心血を注いだ会社を息子に受け継いでほしいとの熱い思いがあったのでしょうか。

家庭では一男三女の、良き父親であり、母のことを大切に愛情深い夫でもありました。晩年は両親共に入院しておりましたが、自分をさておき母の心配をしていた父の優しさが今も胸にしみてきます。

父 靖志は、平成二十二年八月二十五日、六十六年の生涯をとじました。「いい人生でしたね。ただ、ちょっと早すぎたよ…」 父の遺した会社と、かけがえのない家族を大切にすることを誓って見送りたいと思います。

浄靖院釋志学 俗名 井谷 靖志 行年67歳

平成二十二年八月二十五日 往生

喪主 井谷 陽一

詩集『くじけないで』より一 柴田コウさん（98歳の詩人）

一人で生きていくと 決めた時から

強い女性になったの

でも

大勢の人が 手をさしのべてくれた

素直に甘えることも

勇気だと わかったわ

（私は不幸せ…）

溜息をついている

貴方

朝はかならず やってくる

朝陽も 射してくる筈よ